6 月 27 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　4：　32 – 37

「心も思いも一つにし」

頭では「隣人を自分のように愛しなさい」との言葉を思いながら、私たちはなかなかそれを実行できないでいます。人は自分中心にしかものを考えることができません。だから、人と人とが集まっている以上、どうしても軋轢が生まれてしまうのでしょう。

その中で、実力主義とでも呼ぶべき形で、何とかバランスを取ろうとしているのが現代なのかもしれません。どうせ全ての者が満足することは無理なのだから、せめて努力した分だけでも報われてほしい。そう願うのも無理はありません。それくらい厳しい中に私たちは今、生きています。

神はいつも私たちを見捨てられることなく、多くの恵みを与えてくださいます。しかし、私たちは、自分に与えられているものは全て神からの恵みであることがわかっていながら、分かち合うことができないでいます。

「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。」(使徒言行録 4:32)

その意味で「心も思いも一つにして」というのは幻想なのかもしれません。現実を知れば知るほど、思いもますますバラバラになっていく現実に打ちのめされます。

そして、自分ががんばって獲得したものを全て分かち合うということも、現代においてハードルが高くなっています。それは、獲得したものを目減りさせることが自分の価値を損ねるように思えるからかもしれません。他者に分かち合うことが、どこかで「施し」という衣をまとってしまうからかもしれません。分かち合うということはなんと大変なことなのでしょう。

その意味で、神の前に立つのにふさわしくない私たちです。しかし、神はそのような一人ひとりでさえ、忘れられることはありません(「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも／わたしがあなたを忘れることは決してない。」イザヤ書 49:15)。立ち帰りをいつも待っておられます。神が造られたもの全てが共に座り、共に恵みを分かち合う時を待っておられます(「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」詩編 133:1)。

恵みの分かち合いは上下関係ではありません。もちろん、滅私奉公でもありません。分かち合うということそのものが神の国の実現であり、神の義の実現です(「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」マタイによる福音書 6:33)。

幻想かもしれません。夢物語かもしれません。それでも、「信じた人々の群れは心も思いも一つにし」て歩んだ先達たちの思いを、この地上で実現していきたい。そのためには、それぞれが与えられた範囲で、できる限りのことを成し続けていくしかありません。まずは隣人と共に過ごすことから始めましょう。